山口大学
埋蔵文化財資料館だより

No. 2

〔1988年夏の号〕
山口大学埋蔵文化財資料館

『遺跡保存地区』から『遺跡公園』へ

第一学生食堂の西、サッカー場との間に、ポッカリ空地になっている場所、『遺跡保存地区』。山口大学吉田遺跡の中でも、最も集落（竪穴住居）が密集していた地域です。

弥生時代後半から古墳時代の前半……倭国大乱、畿内政権の確立という激動の時代。家族や集団のあり方が変わるということが、住居の構造にも大きく影響し、竪穴の輪郭が円形から方形へ、屋根を支える柱が不定多数から４本へ。……それらの変化が一目で見渡せるのが、この『遺跡保存地区』です。周囲に濠を巡らした弥生時代住居、また火災で焼け落ち、柱の骨組みがそのまま残っていた古墳時代住居など、貴重な例を交えながら。

昭和42年、山口大学は、統合移転工事の真最中だったにもかかわらず、発見したこれらの住居を破壊せずそのまま埋め戻し、『遺跡保存地区』としました。学問の府として取るべき行為をまっとうするため、多くの関係者が努力したことに、敬服せざるをえません。

しかし、現地で土をかぶせたままでも確かに『遺跡保存』にはなるのですが、見ることも触れることもできないうちに忘れ去られてしまうようでは、20年前からの努力が無になります。せっかく保存するのなら、もっと活用できないでしょうか。

当館は、食後や午後に憩いのひとときを過ごす場所となるよう、ここを遺跡公園にしたらと考え、プランを立てています。復原された住居を見、太古に触れ、歴史の胎動を感じながら散策し、さまざまな思いにふけるのも、大学ならではのことではないでしょうか。

もちろん、整備費と維持管理は頭の痛い問題です。しかし、学内の理解・協力によって、解決は可能です。遺跡の『保存地区』から『公園』へ。実現への努力に、皆さんのお力添えをお願いします。

目　次

『遺跡保存地区』から『遺跡公園』へ… (1)
『土から生まれた容器』展 結果報告…(2･3)
遺物からの「発見!!」…「冨」と書かれた須恵器…(3)
Q＆A … 昔の住居や川を、どうやって見つけるのでしょう …(4)
接点 2 …【物理学と考古学 －^{14}C年代測定－】…(5)
業務報告…… (5･6)

企画展《さわってみる歴史》 第１回　『土から生まれた容器』展　結果報告

さわって確かめることを主眼として、半年に一回の企画展開催を計画。第１回は、多少地味ではありますが、土のうつわ（特にその製作技術の発達と、生活の向上との関連）にスポットを当て、大学構内の出土品のみで構成・展示しました。

会　期	来館者
５月18日～６月30日の予定で開催、７月30日まで延長。　実日数64日。	のべ １９３名

【アンケート結果】（回答者 79名、回収率 約41％）

１．所属部局
- 学　生　61（人文18、理16、教育3、経済12、医2、工2、農5、不明〔教養〕3）
- 教　官　5（教育2、農2、教養1）
- 事務官　4（人文・理2、農1、不明1）
- その他　9（地元住民、他大学の学生、学外の埋蔵文化財関係者など）

２．【当資料館の存在について】は、ほとんどの人が「知っていた」との答え。知っている人のみが来館した可能性もあり、この質問はあまり意味がなかったと反省。

３．【山口大学の構内が遺跡だという知識】は、吉田キャンパスについては意外に浸透しており、知らなかったと答えたのは10名だけだった。吉田以外のキャンパスについては、今後、調査成果を積極的にＰＲすることが必要。

４．【展示で一番印象深かったもの】としては、指圧痕・指紋の残る土器をあげた人が多かった（12人）。土器の作り方の粘土模型も注目度が高い。バラバラの土器破片を自分でくっつけてみるコーナーや、「富」の墨書土器、また肥料だめのインパクトも強かった様子。土器が思ったより軽かった、薄かったなど、触れてみる展示ならではの回答も。やはり、「生々しく感じる」ことが印象深さにつながっている。「説明用のパネルを苦労して切り貼りしていること」と書いてくれた方……見苦しかったですか？経費不足のため手作業なので……。これからは、極力きれいに貼るよう努力します。

注目を集めた須恵器の指紋

５．【展示の良い点】は、「直接さわれること」との回答（26人）が圧倒的。説明がわかりやすかった（13人）、展示が見やすかった（14人）との回答も多く、来館者に対しては、当初の目的は達せられたと考えています。

しかし逆に、【悪い点】として、展示以前の環境づくりに対し、館が閉鎖的で入りづらい、もっと宣伝するべきだという指摘が多く、ＰＲ不足を再認識。これからの大きな克服目標です。展示室が狭い、展示品が少ない、いかにも臨時の展示だという意見に対しては、現状で

のベストを尽くした展示に努めるということで、許していただきたいと思います。ただ、「遠慮なくさわってもらう」という企画は、狭く、設備が行き届かないことを逆手に利用した、最良の展示方法であると自負しています。

6．【今後の企画】は、骨や化石を見たいという人が意外に多い。今回の展示品の一つを深く掘り下げてテーマとして欲しいという人も少なくない。古環境や住居など遺跡全体について知りたい、また実際に土器を作ったり、発掘したりしたいという希望もあった。

展示可能なものについては、なるべく今後の企画展で要望にお応えします。

7．【当館への要望】は、やはり、入りやすい雰囲気にして欲しいという意見が目立つ。誰もが利用できる施設として、開かれたイメージを作るよう、努めます。

教官には、展示の説明ミスを専門的にご指摘下さった方もありました。さまざまな貴重なご意見、本当にありがとうございました。

次回の企画展（10～11月を予定）は、今回以上に満足できる展示をお約束します。ご期待下さい。

【資料紹介コーナー】 遺物からの「発見!!」

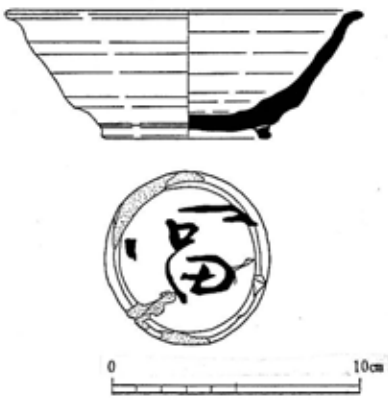
「冨」と書かれた須恵器

企画展でも目を留める人が多かった、墨で「冨」と書きこんだ須恵器の<ruby>椀<rt>わん</rt></ruby>。大学会館の敷地と、その前の空地から、それぞれ破片が発見され、一つにくっついたものです。この一つのうつわは、どれだけの歴史を背負っているのでしょうか。

まず、この須恵器の生まれについて。この椀は、形や土の質からみて、奈良時代末～平安時代初期（８Ｃ末～９Ｃ初）頃の作品。おそらく地元で焼かれたものです。

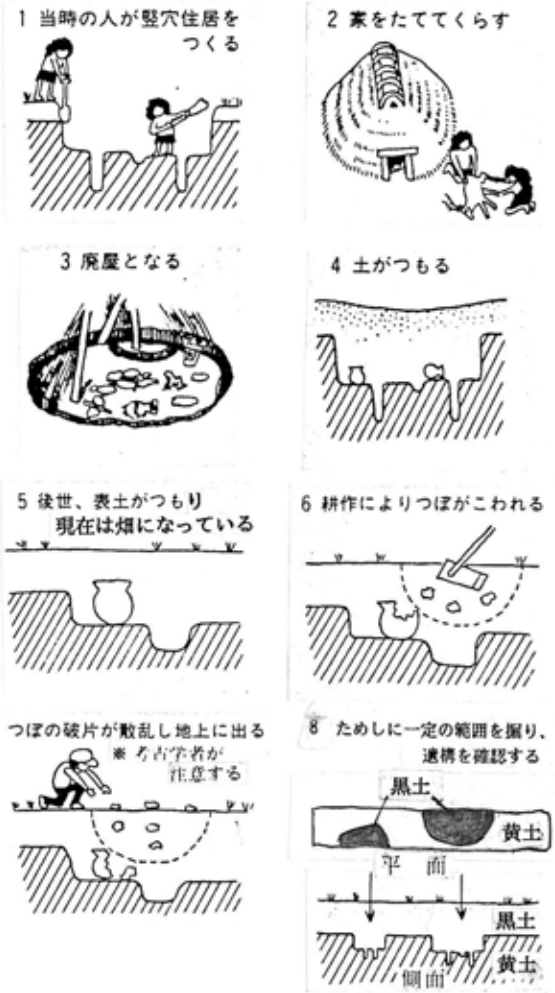
次に、「冨」の文字が何を意味するかについて。一つは、「冨」がおめでたい字だから書き入れて、お守りにしたという考え方。もう一つは、「冨」の字で表わされる人名、または地名が周辺にあったという可能性。ちなみに、時期は下って鎌倉時代初期（12Ｃ末）、吉田周辺は「<ruby>恒冨保<rt>つねとみぼ</rt></ruby>」と呼ばれ、地頭の「恒冨」氏が治めていたと記録にありますが、この「恒冨」が奈良・平安時代まで遡るかどうかは、まだわかっていません。

奈良時代～平安時代初期、墨・筆を扱い、文字が書ける人物は、朝廷に関係ある、ごく限られた知識人だけです。しかもこの「冨」は非常に達筆で、書き慣れた、都風の筆使いです。同じ大学会館の敷地では、<ruby>硯<rt>すずり</rt></ruby>のほか、<ruby>木簡<rt>もっかん</rt></ruby>（朝廷への貢納品に付ける荷札）、<ruby>石銙<rt>せっか</rt></ruby>（ベルトの石製バックルで、官位を表す）なども見つかっていますから、当時この吉田の地に、朝廷とつながり深い施設、人間が存在したことは、まずまちがいなさそうです。



Q&A　昔の住居や川を、どうやって見つけるのでしょう。

昔そこに何があったのかを知るために、発掘調査でまず行なうことは、土の色や質の違いを見分け、それを手がかりにして、地層の堆積が自然か、人為的かを判断することです。昔の地面に人間が手を加えた痕跡、例えば、地面に穴を掘ったり土を盛り上げたり、また石を積んだりした場所を、『遺構』といいますが、この遺構こそが、人々がそこで暮らしていたことを直接示す、文字通り『動かぬ証拠』となります。



遺跡保存地区（1ページ参照）

【左（方形）焼け落ちた古墳時代住居、右（円形）弥生時代住居】

山口市周辺では、古墳時代～弥生時代の地面は、硬く黄色い粘土であったことがわかっています。そしてその上を、遺物を含む粘質の黒い有機土層が覆っているのが普通です。つまり、今の地面から注意深く地層を掘りすすめ、黒い土があったら要注意、その下に黄色い粘土が見えたら、そこが弥生～古墳時代の地面であるという寸法です。

最も一般的な遺構の見つけ方をご説明しましょう。当時の地面である黄色の粘土を見つける時、その上にある黒い土をほぼ水平に取り除いてゆくと、黄色の粘土がほとんど表われても、所々に黒い土の残っている場所があります。ここが、遺構です。もともとは平坦だった地面が、人為的に掘り窪められたために、その窪みの中に、まだ黒い土が残っているのです。黒い土の輪郭、すなわち窪みの輪郭をはっきり確認したら、窪みの中の土を取り除き、その窪みの形や深さ、底の様子、中に埋まっていた遺物などを調べて、それが竪穴住居であるとか、柱穴であるとかの判定をするわけです。

また、川や沼だったような場所の土は、水分を含んで青みがかっています。川の場合は砂や小石などが堆積しており、掘り進めると今でも水が湧くことが多々あります。

考古学での年代推定は、層位学（遺物の新旧は、それぞれの遺物が含まれる地層の堆積順序に一致するという考え方）と、型式学（ものの形は、以前の形・特徴を残しながら変化するので、系譜が辿れるとする考え方）とを基礎としている。発掘担当者は、この二者を組み合わせて遺物の時間的な「順序」を判断する。つまり「Ａより古く、Ｂより新しい」と判断するのが限界で、そうして古い順に並べられた遺物の序列が、実際の暦の上でどこに相当するかを知るには、年号の書いてある遺物などの発見を待つしかない。

シリーズ
接点 2
考古学　物理学
－^{14}C年代測定－

自然科学分野では年代測定法の諸開発に伴い、それを遺跡から発見される実年代のわかる資料に適用してみようとした。それらの方法のなかで現在最も研究が進み、信頼性が高いとされるのが放射性炭素（^{14}C）による年代測定法である。

原理は明解。生物が生命活動を続ける限り、その体内には、炭素（^{12}C）の放射性同位体である^{14}Cが、大気中と同じ濃度で存在するが、死ぬと一定の速度・率で壊れていく。つまり、死んだ生物体内に残っている^{14}Cの量を調べれば、死後どのくらいたったかわかり、ともに発見された遺物の暦年代がわかるというものである。

しかし、問題はある。前提となる大気中の^{14}C濃度が、歴代不変であったとの立証はされていない。^{14}Cが元の量の半分になるのに必要な時間（半減期）にも諸例の報告値があり、混乱を避けるため5568±30年に統一されている。厳密には^{14}C年代は実年代ではないのである。また、他の年代測定法による値とのズレも指摘されており、近年の研究の焦点は、測定値と実年代とのズレの補正にある。そのため、実年代がわかり、かつ時間的順序の明確な考古資料とのクロスチェックによって、測定方法の改良や精度の向上がはかられようとしている。

【次号は…『地質学と考古学 －火山灰－』】

業務報告 【昭和63年４月～７月】

★調査……立会調査６件を、下記の学内工事に伴い実施。

1.経済学部７号職員宿舎（山口市白石2-8-7） 公共下水切替（４月１日）
……宿舎敷地ではないが、周辺の水田には弥生～江戸時代の遺物散布。要注意。

2.教養部 複合棟新営に伴う自転車置場移設（４月15日）……顕著な知見なし。

3.国際交流会館新営に伴う排水管埋設（４月27･28日）
……一昨年の試掘調査の結果、引き続き調査が必要と判断されていた。配管路東端で時期不明の河川跡または溝確認。中央には弥生時代の遺物包含層。

4.教養部 複合棟新営に伴うケーブル埋設（５月10日）……顕著な知見なし。

5.教育学部附属光小学校 遊器具移設（５月26日）
……中世～江戸時代の遺物。

6.医学部附属病院 病棟新営（５月３・８～22日）
……２～３月の試掘調査の結果、引き続き調査が必要と判断された地域を調査。試掘調査同様、石器・剥片などが出土した。

★埋蔵文化財資料館 運営委員会（５月23日）
＊昭和62年度の事業報告、決算報告、調査報告。
＊昭和63年度の事業計画、予算審議。

★外部からの図書寄贈【４月～７月】　凡例：〔発行所（個人寄贈者）〕…『書名』

〔北海道大学埋蔵文化財調査室〕…『北大構内の遺跡６』
〔富山大学人文学部考古学研究室〕
…『谷内16号古墳』『立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ』
『立山町上末釜谷３号窯発掘調査概報』
〔富山県埋蔵文化財センター〕
…『富山県埋蔵文化財センター年報 昭和62年度』『都市計画街路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(6)』
〔石川県高松町教育委員会〕…『高松町 中沼Ｃ遺跡』
〔豊田市教育委員会〕…『近世豊田の俳人』
〔豊田市郷土資料館〕…『豊田市郷土資料館収蔵品目録Ⅶ』
〔京都大学埋蔵文化財研究センター〕
…『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
〔㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター〕
…『京都府埋蔵文化財情報』 第25・26・27・28号
〔奈良大学考古学研究室（水野正好）〕
…『菅原遺跡 ― 平城京西方丘陵窯跡建物跡等の発掘調査 ―』
〔大阪大学埋蔵文化財調査委員会〕…『待兼山遺跡Ⅱ』
〔大手前女子大学史学研究所〕…『大坂城 三の丸跡Ⅲ』
〔㈶大阪文化財センター〕…『亀井北(その3)』『城山(その3)』
〔高槻市立埋蔵文化財調査センター〕…『梶原南遺跡発掘調査報告書』『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要・12』
〔㈶八尾市文化財調査研究会〕…『昭和61年度 事業報告』
『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度』
〔泉佐野市教育委員会〕…『若宮遺跡発掘調査報告書』
『植田池遺跡発掘調査報告書』『川原出地区埋蔵文化財試掘調査報告書』『泉佐野駅上地区試掘調査報告書』
『昭和62年度 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅷ』
〔広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会〕
…『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅵ』
〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所〕
…『草戸千軒町遺跡－第35・36次発掘調査概要－』
〔日本はきもの博物館〕
…『国重要有形民俗文化財 はきものコレクション図録』
〔梅光女学院大学地域文化研究所〕…『地域文化研究 ３』
〔山口県教育委員会〕…『円光寺遺跡』『花ヶ池窯跡』
『追迫遺跡』『天王遺跡』『国秀遺跡』『かわいけ』
『なべくら』『立石遺跡』『坂ノ上遺跡・植松古墳群』
『上ヶ原古墳』『綾羅木郷台地遺跡（明神地区）』
『萩焼 長門深川古窯 西ノ窯発掘調査報告』
〔山口市教育委員会〕…『大内氏築山跡Ⅱ』『小路遺跡』
〔宇部市教育委員会〕
…『東隆寺一字一石経塚』『末信遺跡』『棚井古墳』
〔小野田市教育委員会〕…『小野田桜の木古墳』
〔福岡大学総合研究所〕
…『福岡大学総合研究所報告』 第14・15号
〔福岡市立歴史資料館〕
…『福岡市立歴史資料館研究報告 第12集』
〔古賀町教育委員会〕
…『浜山遺跡』『高木遺跡』『日焼古墳群』『花見遺跡』
『左谷古墳群』『浜山・千鳥遺跡』『花見遺跡 第２地点』
〔鹿児島大学埋蔵文化財調査室〕
…『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅲ』
〔国立歴史民俗博物館（近藤喬一）〕
…『国立歴史民俗博物館研究報告 第7集 古代の祭祀と信仰』

★資料貸出記録

＊図書　　3件（学生：返却済）

＊ ＊

本冊子は、各講座、教官に一部ずつ配布していますが、ぜひ学生個人でもお持ちいただきたいと考えています。当館で配布しておりますので、ご希望の節は気軽にご来館下さい。また、各学部事務室にも置いてありますので、ご自由にお取り下さい。

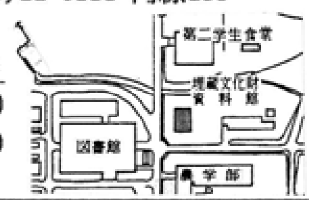
＊ ＊

編　集　余　話

創刊号との間隔が少々短い感はありますが、気にせず第２号をお届けします。今夏、当館は昨年度行なった調査の整理に専心する毎日。『土から生まれた容器』展の来館者数もまずまずで、第２回企画展をはりきって立案中。名案のある方、ぜひお聞かせ下さい。

すべての人が、実り多い秋を迎えることを祈って。

山口大学 埋蔵文化財資料館だより
№２　〔1988年夏の号〕

発行　昭和63年8月15日
編集　山口大学埋蔵文化財資料館
〒753　山口市大字吉田1677-1
☎代　(0839)22-6111 内線299

利用案内（無料）
(平日)8:30～17:00
(土曜)8:30～12:30
日・祝 休館